論文

『源氏物語』絵合巻の朱雀院

植田恭代

はじめに

『源氏物語』絵合巻では、斎宮女御と弘徽殿女御の立后争いをもほのめかす絵合の催しが描かれ、光源氏の後見する斎宮女御の勝利が導かれる。それは、須磨・明石から召還された光源氏の栄華を構築する重要な過程となる。華麗な行事と、権力をめぐる光源氏方と権中納言方の拮抗が印象的なこの巻だが、ここには両者のみならず朱雀院も登場し、その存在巻も軽んじることはできない。絵合巻頭は斎宮女御の冷泉帝への入内から始まり、かつて斎宮女御に心を寄せた朱雀院の意に反する入内を「口惜しく」思しめす朱雀院が描かれる。朱雀院は、その後も絵合の開催に至る物語の進行に絡んでいく。後宮をあげて盛大に執り行われる行事を描くなかに、賢木巻の場面を呼び起こしながら朱雀院と斎宮女御の描写が随所に挟まれている。

本稿では、絵合という華麗な盛儀が注目を集めるこの巻の物語を、朱雀院に着目することから、いま一度考察してみたい。

一、呼び起こされる賢木巻

絵合巻の朱雀院の描写をたどりみることから始めたい。巻頭は、斎宮の入内から始まり、賢木巻をふまえた朱雀院の描写となっている。(1)

前斎宮の御参りのこと、中宮の御心に入れてもよほしきこえたまふ、こまかなる御とぶらひまで、とりたてたる御後見もなしと思しやれど、大殿は、院に聞こしめさむことを憚りたまひて、二条院に渡したてまつらむことをもこの度は思しとまりて、ただ知らず顔にもてなしたまへれど、おほかたのことどもはとりもちて親めききこえたまふ。　絵合巻　三六九頁

「前斎宮の御参りのこと」と、まさに前斎宮の冷泉後宮入内そのものから語り起こされ、それが藤壺の強い意向であることが示される。藤壺は、すでに中宮を退き出家をしているにもかかわらず、あえて威厳を感じさせる「中宮」と呼ばれる。澪標巻を受けて、この藤壺「中宮」の意向とそれに跪く光源氏の思惑ゆえに前斎宮が冷泉後宮に入るのであれば、斎宮の母故六条御息所の遺言もあり光源氏が後見するのはごく自然なりゆきである。しかし、ここに描かれるのは、すんなりとは動けず、朱雀院への申し訳なさを感じている光源氏である。光源氏が朱雀院の心中を慮り、自邸の二条院に前斎宮を移すことさえ思いとどまると示されるのが、この冒頭部分である。

華麗な行事が描かれるこの巻は、一方で、賢木巻の伊勢下向場面を呼び起こし、冒頭から朱雀院の存在が大きく印象づけられる巻でもある。

巻頭には、朱雀院の描写が続いていく。

院はいと口惜しく思しめせど、人わろければ御消息など絶えにたるを、その日になりて、えならぬ御よそひども、御櫛の箱、うちみだりの箱、香壺の箱ども世の常ならず、くさぐさの御薫物ども薫衣香またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ匂ふまで、心ことにととのへさせたまへり。　絵合巻　三六九～三七〇頁

朱雀院は「いと口惜しく」思う。しかし、入内当日には、装束に加えて御櫛の箱をはじめとした調度品を格別に整えて贈る。御櫛の箱が持ち出されるのは、賢木巻の伊勢下向の際に描かれていた別れの櫛の儀の場面による。続く部分には、御櫛の箱に寄せた朱雀院の和歌があり、それを受けて光源氏が思いをめぐらせている。

さし櫛の箱の心葉に、

わかれ路に添へし小櫛をかごとにてはるけき仲と神やいさめし

大臣これを御覧じつけて、思しめぐらすに、いとかたじけなくいとほしくて、わが御心のならひあやにくなる身をつみて、かの下りたまひしほど、御心に思ほしけんこと、かう年経て帰りたまひて、その御心ざしをも遂げたまふべきほどに、かかる違ひ目のあるをいかに思すらむ、御位を去り、もの静かにて世を恨めしとや思すらむなど、我になりて心動くべきふしかな、と思しつづけたまふに、いとほしく、何にかくあながちなることを思ひはじめて、心苦しく思ほしなやますらむ、つらしとも思ひきこえしかど、またなつかしうあはれなる御心ばへを、など思ひ乱れたまひて、とばかりうちながめたまへり。

絵合巻　三七〇～三七一頁

朱雀院の一首は、伊勢下向時の別れの櫛ゆえに結ばれぬ仲と神が決めたのかという。ここに至り、賢木巻の伊勢下向の場面と絵合巻

のこの場面が見合う。斎宮入内に落胆する朱雀院に思いをめぐらす源氏の心中では、朱雀院の前斎宮への執心に対する懸念がたどられている。そのなかで、前斎宮の入内は「かかる違ひ目」「あながちなること」と表される。「違ひ目」とは、かつて『源氏物語』第二の予言とされる若紫巻の夢合わせで光源氏の須磨流謫を暗示した表現でもあり、朱雀院の衝撃の大きさが表されている。

周囲や光源氏に促されての前斎宮の返歌は、次のように詠まれる。

……いと恥づかしけれど、いにしへ思し出づるに、いとなまめききよらにて、いみじう泣きたまひし御さまを、そこはかとなくあはれと見たてまつりたまひし御幼心もただ今のこととおぼゆるに、故御息所の御事など、かきつらねあはれに思されて、ただかく、

別るとてはるかに言ひしひとこともかへりてものは今ぞかなしき

とばかりやありけむ。　絵合巻　三七一～三七二頁

前斎宮の回想として、美しい姿でたいそうお泣きになった朱雀院の様子を感慨深く拝見した自身の幼心も、母故御息所のことも思い出されていく。前斎宮の心中を通して、ふたたび伊勢下向の場面がよみがえり、回想されるその折のひとことも悲しいという返歌が詠まれる。

続く部分では、朱雀院の美しい姿とそれに見合う前斎宮の様子が描かれる。

院の御ありさまは、女にて見たてまつらまほしきを、この御けはひも似げなからず、いとよき御あはひなめるを、内裏はまだいといはけなくおはしますめるに、かくひき違へきこゆるを、人知れずものしとや思すらむ、など憎きことをさへ思しやりて、胸つぶれたまへど、今日になりて思しとどむべきことにしあらねば、事どもあるべきさまにのたまひおきて、睦ましう思す修理宰相をくはしく仕うまつるべくのたまひて、内裏に参りたまひぬ。　絵合巻　三七二頁

二人は「いとよき御あはひなめる」と表され、まだ幼い冷泉帝の方が不釣り合いであるとする。それにもかかわらず冷泉帝に入内させる藤壺と光源氏方の画策は、「かくひき違へきこゆる」と表され、不愉快に思っているであろう朱雀院への気遣いが描かれている。

とどめられない事態のなかで、朱雀院に対する光源氏の遠慮はさらに続く。

うけばりたる親ざまには聞こしめされじと院をつつみきこえたまひて、御とぶらひばかりと見せたまへり。　絵合巻　三七二～三七三頁

賢木巻の櫛の箱は、朱雀院と光源氏の対面場面でもふたたび話題にのぼり、伊勢下向が回想され、朱雀院の執心の強さを物語る。

院には、かの櫛の箱の御返り御覧ぜしにつけても、御心離れがたかりけり。そのころ大臣の参りたまへるに、御物語こまやかなり。事のついでに、斎宮の下りたまひしこと、さきざきものたまひ出づれば、聞こえ出でたまひて、さ思ふ心なむありしなどはえあらはしたまはず。大臣も、かかる御気色聞き顔にはあらで、ただいかが思したるとゆかしさに、とかうかの御事をのたまひ出づるに、あはれなる御気色あさはかならず見ゆれば、いといとほしく思す。　絵合巻　三七四～三七五頁

このように、絵合巻の冒頭は、斎宮の冷泉後宮入内を描くが、物語は賢木巻を呼び起こし、朱雀院の存在を知らしめ、その意に反して「横車」ともいうべき事態を招いた光源氏の朱雀院への気兼ねと悩ましい心中を、細かに描出していく。

娘の立后に絡めて権力を競う光源氏と権中納言の拮抗を描くのみならず、ここに朱雀院が入り込み、その存在感は重い。盛儀を描く絵合巻の物語本文を、重みをもって描かれる朱雀院の側から、いましばらく検討してみたい。

二、絵合巻と史実

絵合巻には、史実のイメージが濃厚に漂う。華麗な絵合という行事が天徳四年内裏歌合をふまえていることは、早く四辻善成『河海抄』に指摘され[2]、清水好子氏の丹念な精査によって周知されてきた[3]。女房や装束の描写により絵合巻が村上朝の史実における盛儀を彷彿とさせるのは揺るぎない事実であり、清水氏以降も言及が重ねられ、近年では文化的な観点からも着目されている[4]。史上の盛儀を強く意識した場面が構築されて、物語の冷泉帝と史実の村上天皇のイメージが見合い、冷泉帝の聖代を印象づけ、そうした行事を支える光源氏の威勢を象徴している。

さらに、ここでは史実の人物名も散見する。藤壺御前の物語合では、左方の出した「物語出で来はじめの親なる竹取の翁」には、「絵は巨勢相覧、手は紀貫之書けり」と絵師と歌人の実名がある。巨勢相覧は、『河海抄』では一説として巨勢金岡と同一人物という説や金岡より先代とする説をあげるが[5]、一条兼良『花鳥余情』は金岡の子とし、金岡が寛平の時の人であればその子は紀貫之と同時代として、延喜年間の絵師を考える[6]。紀貫之は、言うまでもなく『古今和歌集』の編者で醍醐朝に活躍した歌人。一方の右方の出した「宇津保の俊蔭」は、「絵は常則、手は道風」であり、（飛鳥部）常則は、須磨巻に「このごろ上手にすめる千枝、常則など」とあり、村上朝に活躍した絵師である[7]。また、（小野）道風は藤原行成、藤原佐理

とともにあげられる三蹟の一人で、その活躍は村上朝に及ぶ。これらの人物名があげられることによって、村上朝の盛儀を意識して描かれるこの絵合では、左方には醍醐朝の印象が漂い、右方は当世の印象を強め「いまめかし」と表されるその趣向と見合う。

史上の人物名があげられるのは、朱雀院の登場場面も例外ではない。朱雀院は斎宮女御の冷泉後宮入内時ばかりではなく、この巻の中心となる絵合の場面にも登場し、その描写のなかで史実のイメージが漂う。藤壺御前の物語合で決着がつかず帝の御前での勝負となり、それをきいた朱雀院も絵を梅壺（斎宮）女御にさしあげる場面である。

……院にもかかること聞かせたまひて、梅壺に御絵ども奉らせたまへり。

年の内の節会どものおもしろく興あるを、昔の上手どものとりどりに描けるに、延喜の御手づから事の心書かせたまへるに、またわが御世のことも描かせたまへる巻に、かの斎宮の下りたまひし日の大極殿の儀式、御心にしみて思しければ、描くべきやうくはしく仰せられて、公茂が仕うまつれるがいといみじきを奉らせたまへり。艶に透きたる沈の箱に、同じき心葉のさまなどいといまめかし。御消息はただ言葉にて、院の殿上にさぶらふ左近中将を御使にてあり。　絵合巻　三八三～三八四頁

「年の内の節会」とあるのは、一年の節会を昔のすぐれた絵師たちが描いた絵に「延喜の御手づから」詞書を書いた醍醐天皇由来の品、また絵師の「公茂」は巨勢公茂、『河海抄』は公忠の子で金岡の孫とするが異議もあり確定はしにくいが、[8]先に『竹取物語』の絵を描いた巨勢相覧より時代がくだるのは間違いなかろう。この文脈によれば、朱雀院は醍醐天皇宸筆の品を受け継いで所持し、さらに自身在位中のことを描かせる。とりわけ当時の大切なできごととして心に深く刻まれる斎宮下向時の大極殿の儀式を、詳しく指図して当代の絵師公茂に描かせた絵をさしあげているのである。朱雀院が醍醐天皇の系譜に連なり、朱雀院の御代の象徴的なできごととして斎宮下向時の別れの櫛の儀があることを、絵という確固たる形によって表しとどめている。このくだりの末尾には、「院の御絵は、后の宮より伝はりて、あの女御の御方にも多く参るべし。尚侍の君も、かやうの御好ましさは人にすぐれて、をかしきさまにとりなしつつ集めたまふ。」とあり、朱雀院の絵は、母弘徽殿女御から伝えられて梅壺（斎宮）女御と競い合う弘徽殿女御にも伝えられ、朧月夜も支援していることが添えられる。そのなかで、朱雀院は自らの意思で、醍醐天皇由来の絵に梅壺（斎宮）女御との大切な記憶を刻印し、帝王の正当な系譜上にある自身の御代をかたちに表しているのである。

光源氏方と権中納言方の拮抗に目が向けられがちな絵合巻にあって、朱雀院の用意した絵も、ただの絵ではあり得ない。史実の帝の系譜がイメージとして重なるなかに物語の朱雀院を据えてその正当性を印象づけ、一方で、譲位後も心に別れの櫛の儀が深く刻まれて

いる朱雀院像を描く。

絵合巻における朱雀院は、ただ斎宮女御の入内を嘆くためだけに登場するばかりではない。史実のイメージが色濃く揺曳する絵合巻では、物語の桐壺朝に醍醐朝のイメージが重なり、光源氏の後見する冷泉朝に村上朝のイメージが重なることを確認し、そのはざまにある朱雀院もまた史上の朱雀帝と見合う。物語は、その御代の象徴的な記憶として賢木巻の別れの櫛の儀を呼び起こし、重ねて強調する。

三、史実の朱雀院と斎宮

絵合巻の朱雀院の登場場面の前提となり、繰り返し呼び起こされる賢木巻の「別れの櫛の儀」について、いましばらく考えてみたい。

別れの櫛の儀は、史上の斎宮下向の際に、野宮を出たのちに大極殿で行われる儀式であり、斎王研究の側からも、所京子氏をはじめとして詳細な検討が重ねられその次第が究明されてきた。[9]

いま、史実の朱雀朝に注目してみると、そこで斎宮となったのは、承平元年（九三一）卜定の雅子内親王、承平六年春卜定の斉子内親王、承平六年九月十二日卜定の徽子女王の三人である。そのなかで、徽子女王は『源氏物語』の側からも着目されてきた史実の「斎宮女御」である。徽子女王は、醍醐天皇第四皇子重明女、斎宮は天慶八年（九四五）正月十八日退下、天暦二年（九四八）村上天皇に入内し翌年女御となり、「承香殿」に入ったが「斎宮女御」の呼称で家集も知られる女性である。村上天皇との間に規子内親王を設け、貞元二年（九七七）、娘の伊勢下向に同行した。前例をみないこの母子下向は、『源氏物語』の賢木巻の六条御息所と斎宮女御の母子下向と類似することが指摘されてきた。[10]賢木巻の下向は九月十六日であり、『源氏物語』の斎宮下向がこの母子下向をふまえているのは揺らぐまい。しかし、人物造型に史実が影を落とす場合、必ずしも一人のみに限定されるものでもないのは、光源氏の場合を考えてみても自明であろう。なにより、「斎宮女御」としては、娘の規子内親王より村上天皇の女御となった母の徽子女王である。絵合巻では、その「斎宮女御」として造型されている。物語の冷泉朝に史実の村上朝のイメージが重なり、一方で、「斎宮女御」徽子女王の存在が彷彿とする。さらに、朱雀朝の斎宮下向という点においても、母の徽子女王は見逃せない。徽子女王は、早く別れの儀の記録が知られる斎宮でもある。徽子女王の斎宮下向についてはすでに研究が重ねられているが、[11]いまあらためてその斎宮下向までをたどってみると、斎宮に卜定されたのは前述のとおり承平六年（九三六）九月十二日、雅楽寮に設けられた「初斎院」に入ったのは翌年七月十三日、同年九月二十七日に野宮に入り、承平八年から改元された天慶元年（九三八）九月十五日に大極殿（八省院）での儀式を終えて、伊勢に下向している。ちなみにこの時の改元は、同年四月十五日に大きな地震がありその後も余震が続いたこと、世を騒然とさせた将門の乱のためであったと、諸記録は伝える。[12]

この不穏な社会状況のなかで、徽子女王の斎宮下向は準備が進め

られた。その下向直前の櫛の儀の様子が、『本朝世紀』に記されている。[13]

天慶元年九月十五日己未。天晴。今日。斎王参二向伊勢大神宮。御名徽子女王重明親王太娘也。於二帝皇一姫也。春秋十歳。……略……天皇依二御物忌一不二出御一。然而事依レ有二其期一。准二貞観三年括子斎王例一行レ之。大納言平伊望卿進二八省院一。撿二臨所之事一。就二昭慶門東廊座一。申一剋。太政大臣参入。就一昭慶門内東廊座一。内記令レ覧二宣命一了後。太政大臣移二著西廊外休息所一。戌三剋。斎王行禊之事了。

この時、天皇は物忌みのため出御しなかった。続く記述によると、貞観三年の括子内親王の例に準じて行っている。『貞信公記』には、「依御物忌、皇帝不幸。仍以黄楊木小櫛、愚加斎王額」とあり、帝に代わり徽子の祖父である忠平が別れの櫛の儀を代行した。[14]

徽子内親王の斎宮下向は、四月の大地震とその後も続く余震に怯え、将門の乱の記憶もさめやらぬ不穏な状況下で行われた。さらに、この時、八省院における別れの櫛の儀は物忌みのため朱雀帝が出御せず、太政大臣忠平が代行した。『貞信公記』ではこの日の記述も「地震」から始められている。平穏で順調な斎宮下向とはいいがたいのが、徽子女王の場合であった。

翻って、物語の斎宮下向をみれば、徽子女王とは設定が異なる。史実の朱雀帝によって行われなかった櫛の儀が賢木巻で描かれ、史実の朱雀朝と異なる場面が朱雀院と斎宮の要を為す記憶として、物語に繰り返し呼び起こされる。史実の斎宮女御を強く意識しつつ、それをこえて物語世界を愛情深く生きる朱雀院と斎宮女御が造型されている。

四、物語世界の朱雀院と斎宮

絵合巻では、物語歴代の帝が史実の帝ならびにその系譜と見合うように描かれ、一方で、史実では帝によって行われなかった儀が朱雀院の大切な記憶として刻印される。譲位後も斎宮に深い愛情をかけ、冷泉後宮の女御となったいまもなお支援を惜しまぬ朱雀院がいる。祖父右大臣や母弘徽殿女御に翻弄され、都に召還された光源氏が栄華の階梯を歩むなかで一見弱い印象さえ与える朱雀院。しかし、その朱雀院は、絵合という盛儀をとおして光源氏方が勝利をおさめる絵合巻で、帝という権力の系譜に確かに連なり、愛情深い人間味豊かな上皇像を結ぶ。

絵合巻の研究の嚆矢である前述の清水好子氏は、早く絵合場面の本文には引歌がないことを指摘されていた。華麗な盛儀の場面を中心とするこの巻は、歌語の挟まりにくい描写も多い。そうしたなかでも、朱雀院ならびに斎宮女御の登場場面には和歌があり、情趣を深める。絵合の場面でも、前掲の引用部分のあとには、和歌のやりとりが続いていた。

かの大極殿の御輿寄せたる所の神々しきに、

身こそかくしめのほかなれそのかみの心のうちを忘れしもせず

とのみあり。聞こえたまはざらむもいとかたじけなければ、苦しう思しながら、昔の御髪ざしの端をいささか折りて、

しめのうちは昔にあらぬ心地して神代のことも今ぞ恋しきとて、縹の唐の紙につつみて参らせたまふ。御使ひの禄などいとなまめかし。

院の帝御覧ずるに、限りなくあはれと思すにぞ、ありし世を取り返さまほしく思ほしける。大臣をもつらしと思ひきこえさせたまひけんかし、過ぎにし方の御報いにやありけむ。

絵合巻　三八四～三八五頁

ここでは、絵をめぐる描写のなかに、「しめのほか」「しめのうち」を詠み込む和歌がはさまれ、それらは斎宮下向時の別れの櫛の儀を呼び起こすキーワードとなる。「しめのほか」は『道綱母集』七、『実方集』七九、『和泉式部集』四五五、『和泉式部続集』三四四などに用例が確認でき、「しめのうち」は『金葉集』（二度本　六五〇、三奏本　六四二）が早い。[15] すでに熟している伝統的な歌語ではなく、むしろ近しい印象のある歌語を用いた歌が交わされる。朱雀院の和歌は「大極殿の神輿寄せたる所の神々しき」という絵に書かれ、斎宮の方は「昔の御髪ざしの端」をわずかに折って書かれる。賢木巻の記憶を共通の基底として、絵と和歌の情趣が重なり、愛情深く情趣を解する朱雀院の人間像が彷彿とする。

絵合巻では、史実の系譜のイメージを揺曳させながら、帝の正統的な系譜にある朱雀院を表し、史実の朱雀朝では徽子女王下向の際に行われなかった別れの櫛の儀を、物語の朱雀朝の大切な記憶として刻みつけていく。光源氏方が勝利をおさめた後、巻末に朱雀院は登場せず物語は光源氏の心中に引き取られていくが、そこに至る物語に朱雀院はこれほどの存在巻をもって登場している。物語の帝として弱い印象さえあった朱雀院が、権力を競う光源氏方と権中納言方の描写の間で、一時代の帝としての存在感を揺るぎないものとし、同時に愛情深く物語世界を生きてきたその半生と人物像が描き出されている。

のちの物語をみれば、若葉巻に上皇の存在感が示され、柏木巻では思いがけぬ愛娘の密通がもたらす出家に、娘を思う心の闇にくれまどう父院の姿が描かれる。それに先がけて絵合巻の朱雀院がある。朱雀院は、人間としての造型を固めながら、光源氏の物語に独自の存在感を表し続けていく。

注

（1）『源氏物語』本文の引用と頁数は、すべて新編日本古典文学全集（小学館）による。

（2）清水好子氏は「絵合の巻の考察――附、海抄の意義――」『源氏物語の文体と方法』（東京大学出版会　一九八〇年）のなかで、絵合巻について、『河海抄』以前の古注はほとんどふれていないことを指摘する。

（3）注（2）清水氏文献。
（4）河添房江「天徳内裏歌合から読み解く『源氏物語』」『源氏物語時空論』（東京大学出版会　二〇〇五年）。
（5）『河海抄』は「一説云巨勢金岡相覧同人也云々　但如高名録者相覧猶先代人也金岡は仁明天皇御時人也」とする。
（6）『花鳥余情』は「巨勢相覧者金岡之子云々金岡寛平時人為其子則可為貫之同時人」とする。
（7）『源氏物語　鑑賞と基礎知識　絵合』（至文堂　二〇〇二年）所収「相覧・常則・公茂」に詳細な考察がある。
（8）注（7）文献では、『巨勢氏系図』の混乱を指摘し、『雅兼卿記』や『古今著聞集』から相覧、公忠、公茂をやや年の離れた兄弟とする。『河海抄』が親子とする事情はさらに検討の余地があろう。
（9）所京子『斎王の歴史と文学』（国書刊行会　二〇〇〇年）、歴史・文学双方から斎宮・斎院について総合的に論じた後藤祥子編『王朝文学と斎宮・斎院』（竹林舎　二〇〇九年）など。
（10）福嶋昭治「斎宮群行の道」（注（9）後藤祥子編文献所収）に主要な事柄が整理されている。
（11）山中智恵子『斎宮女御徽子女王』（大和書房　一九七六年）、清水好子「斎宮女御徽子女王」『王朝女流歌人抄』（新潮社　一九九二年）など。
（12）『日本紀略』承平八年＝天慶元年五月二十二日条に「改三元天慶元年一。依二厄運地震兵革之慎一也。」とある。
（13）『本朝世紀』の本文引用は、国史大系（吉川弘文館）による。
（14）『貞信公記』の本文引用は、大日本古記録（岩波書店）による。
（15）「しめのうち」と「しめのほか」の用例は次のとおりである。本文引用は新編国歌大観による。

しめのうちにきねのおとこそきこゆなれ
『金葉集』二度本　六五〇、三奏本　六四二

たのみすなみかきをせばみあふひぐさしめのほかにもありといふなり
『道綱母集』七

たれならむいか（ママ）でのもりにことゝとはむしめのほかにてわがなかりけむ
『実方集』七九

ゆふかけておもはざりせばあふひぐさしめのほかにぞ人をきかまし
『和泉式部集』四五五

かざせどもかひなき物はおのがひくしめの外なるあふひなりけり
『和泉式部続集』三四四